「左利き」におけるレスコフの物語り方

藤田智子

レスコフは物語る作家である。この作家はロシア文学におけるスカースの系譜のもっとも重要な位置のひとつを占める。「左利き」は、1881年、この作家の物語る力が円熟した時期に、特にスカースを標榜して創作された。発表当時の題名「トゥーラのやぶにらみの左利きと鋼鉄の蚤のスカース」(Сказ о тульском косом Левше и о стальной блохе)は、1889年に作品集を出版するときレスコフ自身によって括弧付きの副題に格下げされたが、それでも題名の一部として残り、現在に至っている。

ついでながら、この改題の事情も興味深い。初出の題名には「ギルドの伝説」(Цеховая легенда)という副題が付いており、またこの版には序文も添えられていて、その序文には、この伝説は作者がある年老いた兵器工の土地ことばで語るままを書き留めたものであると述べてあった。レスコフは、この韜晦が当時の批評家たちに真実と誤解されたのに辟易して、表題を「左利き」(Левша)と変え、序文も削除したのだという。(1) 筆録と宣言しただけで筆録と受け取られるわけではない。作品自体が、文体・リズム・イントネーションから発想の仕方・物のつかみ方に至るまで完全に民衆的でなければならない。したがって皮肉なことに、この誤解はレスコフが完全に民衆的に書くことに成功したことを証拠立てていると言えよう。

本稿では、冒頭の一段落を出発点として、レスコフの物語り方を作中人物の描き方・語り手の「低さ」・過剰な語りの3点に分けて整理してみたい。

> Когда император Александр Павлович окочил венский совет, то он захотел по Европе проездиться и в разных государствах чудес посмотреть. Объездил он все страны и везде через свою ласковость всегда имел самые междоусобные разговоры со всякими людьми, и все его чем-нибудь удивляли и на свою сторону преклонять хотели, но при нем был донской казак Платов, который этого склонения не любил и, скучая по своему хозяйству, все государя домой манил. И чуть если Платов заметит, что государь чем-нибудь иностранным очень интересуется, то все провожатые молчат, а Платов сейчас скажет: так и так, и у нас дома свое не хуже есть, ---и чем-нибудь отведет. (2)

皇帝アレクサンドル・パーヴロヴィチはウィーンの会議を終えたとき、ヨーロッパをざっと回ってさまざまな国で珍しいことを見たいと思い立った。彼はあらゆる国を訪れたが、どこでもその優しさゆえに、いつでも、どんな人とも打ち解けた会話をし

た。彼らは皆、何かで彼を驚かせたものだ。そして自分たちに対して感服させようとした。しかし彼の傍らにはドン・コサックのプラートフがいた。プラートフはこのように御感が傾くのを嫌っていた。それに自分の領地を恋しがって、始終皇帝に帰国を勧めていた。それでプラートフは皇帝が何かの外国製品にひどく興味を引かれているのに気づくやいなや、陪従が皆黙っているのにプラートフはすぐ言うのだった。たいしたことはありません。わが国にも優るとも劣らない国産のがあります。---そして何とかして紛らせてしまうのだった。

この冒頭の一段落に、既に上記3点の特徴の芽が現れている。まずアレクサンドル帝の形象について。ストリャロヴァの指摘によれば、第1文の前半部は、語彙も、ゆっくりしたリズムも、温かい親愛の情を込めて皇帝を敬うよう読者に仕向ける。(3) この皇帝は、歴史上的人物アレクサンドルⅠ世ではなく、ほんの一昔前まで神聖にして侵すべからざる光輝をまとってこの世にいました、名と父称で呼び申し上げるのが似つかわしい、赤子にとっての父のようなお懐かしい方と感じられる。

「しかし、すぐ隣で用いられる《無邪気な》俗語表現《проездиться》(ざっと回る)が、フレーズ全体のイントネーションを急変させる。接頭語《про-》はこの動詞に、一瞬で済まされ、皮相な部分にだけ及ぶ動作というニュアンスを与える。この語のせいで読者(聞き手)に帝はふまじめな意図を持っているという感覚が生まれ、帝はごく駆け足の、そしてそれゆえ皮相とならざるをえないヨーロッパ巡りの印象で済ますつもりだということが見透かされる。このようにだんだんアレクサンドル帝の個性が格下げされていく。」(4) したがってアレクサンドル帝が「その優しさゆえに、いつでも、どんな人とも打ち解けた会話をした」という第2文の叙述も、一見したところは帝の温かい人柄を称賛しているようでいながら、実はその底に帝に対する否定的評価の層を隠し持つことになる。この二重性が明らかになるのは次の章である。帝はイギリス人たちに精巧なピストルを見せられて驚嘆する。

Государь взглянул на пистолю и наглядеться не может.
Взахался ужасно.
---Ах, ах, ах,---говорит,---как это так...как это даже можно так тонко сделать! (28)

帝はこのピストルを一目見るなり、いくら見ても飽き足らなくなった。
ものすごいため息をつきはじめた。
---あーあーあー、何という細工であることよ・・・これほど精巧に作ることがどうして出来るのであろう!

「後続する間投詞によって強調され、音声上も表現力抜群である動詞《взахался》(ため息をつきはじめた)は、ツァーリの驚嘆の程度だけでなく、彼がどれほど度を失い、呆然としているかをも伝えて、同時に滑稽な効果も生んでいる。このように、叙述の最初からツァーリの形象は読者の目に《二重にダブって》見えはじめる。その二重の像とは、語

り手が族長に対して抱くような伝統的敬意を感じる父なるツァーリと、君主にふさわしからぬナイーブさを示す意志薄弱な人間とである。」[5] このように、アレクサンドル帝の形象はこのエピソードによって二重になり、豊かになる。そしてこれ以後、皇帝の「優しさ」や「いつでも、どんな人とも」なされる「打ち解けた会話」が言及されるとき、それらの語は、帝の柔弱さや、どんな物にもやすやすと感心する不定見という否定的評価の層をはっきり響かせるようになり、やはり含蓄豊かになる。 アレクサンドル帝はピストルに感嘆して自らの形象を二重にした直後、昔話の王のように振る舞ってその形象をさらに富ませる。

И к Платову по-русски оборачивается и говорит: ---Вот если бы у меня был хотя один такой мастер в России, так я бы этим весьма счастливый был и гордился, а того мастера сейчас же благородным бы сделал. (28)

そしてプラートフにロシア語でいった。－－－もし私のロシアにこのような名人が一人でもいたなら、非常に嬉しく誇らしいであろう。そのような名人ならすぐにも貴族に取り立ててやろうものを。

この約束は、「民衆の昔話で事件の発端となり、善い若者たちを王の願望を実現して褒美をかち取ろうという勇ましい試みに駆り立てる約束によく似た約束」[6] である。じっさい、この言葉はプラートフを、このピストルを作ったのがじつはロシアの職人であるということを示す行為に駆り立て、事件の発端というフォークロア的機能を果たす。もっとも、今問題なのは筋を進行させるその機能ではなく、アレクサンドル帝の形象に与えた微妙な影響である。昔話には賢い王、愚かな王、恐ろしい王、優しい王、さまざまな王がいるものの、彼らは皆人間的個性を失った類型的タイプである。また、アレクサンドル帝の似ている王が特定されているわけでもなければ、彼らが帝の人間的個性を表現するのに役立つわけでもない。むしろ彼らはアレクサンドル帝の形象をぼやかして平板な類型的タイプに向かわせるであろう。それにもかかわらず、アレクサンドル帝は彼らのように振る舞うことで昔話の豊穣な世界を呼びだし、フォークロアの香気を身にまとったことで自らの形象を富ませた。あの約束は形象を詳しくすることはなかったが、つかみがたい香気を巧みに吹き込むことで形象を豊かにしたのだと、やはり言えよう。

以上から作中人物の描き方の特徴が２つ引き出される。第一に、「エピソードを次々と連ね、叙述を進めるにつれてデッサンを蓄えていく」[7] という形象の作り方である。学問は、我々に対し、速く過ぎる人生の試行錯誤を減らす。無学は、作中人物の形象を表現するのに周囲の風景・事物・雰囲気を効果的に用いることを知らない語り手に対し、思い浮かぶままに楽しく物語られるアネクドートの連なりを、すなわち叙述の試行錯誤を増やす。第二に、要所要所に点綴されたトーンの強い語の利用である。厳選された《проездиться》（ざっと回る）は、語自体の口語的文体[8] によって目立ち、接頭語《про-》の力でイントネーションを急変させてアレクサンドル帝の形象の膨らみを予告し、「優しさ」、「打ち解けた会話」も叙述が進むにつれてテキストからの影響下に肯定的ニュアンス・否定的ニュアンスをあわせもつ内容豊かな語に成長していき、自らのテキストへの影

響力を強めて、エピソードを連ねる力になっていく。これら2つの特徴についてゴーリキイの優れた比較を参照することによってより理解しやすくなるだろう。「トルストイやトゥルゲーネフは主人公の周囲に一種独特の雰囲気を醸しだし、それによっていっそう彼らに美しく生気を添えるのを好んだ。また風景描写と想念や感情の変化の描写を広く用いた。レスコフはほとんどいつもそれをしないが、話し言葉を細やかに手操り、巧みに織りなすことによってまったく同じ効果を得ているのである。」(9)

次に語り手の「低さ」について。この作品では、語り手が年齢・出自・生活振りに至るまで序文ではっきり設定されている。再び冒頭の段落にもどろう。この語り手の歴史・地理認識は教育を受けた知識人と異なる。第1文でアレクサンドル帝を名と父称で呼び、ウィーン会議を小文字で始まる普通名詞（венский совет） で呼ぶ呼び方は、序文のレスコフ自身の言葉「アレクサンドルⅠ世」（император Алелсандр Первый） と対立する。また、後にこの語り手は主人公の船がロンドンから地中海を通ってフィンランド湾に入ってきたと、しかも地中海を《Твердиземное　море》と言い誤りながら述べる。

この語り手には言い間違いが多い。冒頭第2文の《междоусобные》がすでにして、本来「内乱の」の意を持つ形容詞を「身内同士でなされるかのように打ち解けた」の意に用いた誤用である。言い間違いの効果が最もよく現れているのは、アレクサンドル帝とプラートフがイギリスの列品館で何を目にしたかを列挙するくだりであろう。次の引用文中、下線を付した語が言い間違いである。これらはチチェーリンも指摘するとおり、「道化師の言葉のように滑稽」(10)である。これらはレスコフの造語らしい。名前とは何か？　バラと呼んでいる花を別の名前にしてみても美しい香りはそのままだが、巧妙な「言い間違い」は作品のトーンを決定し、叙述を生き生きさせて読者の興味をかき立て、彼らを笑わせる。

> Англичане сразу стали показывать разные удивления и пояснять, что к чему у них приноровлено для военных обстоятельств: <u>буреметры</u> морские, <u>мерблюзьи мантоны</u> пеших полков, а для конницы смолевые <u>непромокабли.</u>(27)

> イギリス人たちはすぐさまさまざまの珍品を示して、戦争用に自分たちはどれを何に使うのか説明しはじめた。海上暴風計、歩兵用ラクダ毛マント、騎兵隊用にはタール引きの防水マント。

さらにまた、この語り手には非標準的な言葉が多い。今あげた引用文中の《приноровлено》（使われる）も口語であり、(11)　既に見た冒頭第1文の絶妙な語《проездиться》（ざっと回る）も口語だった。一方冒頭第2文の《преклонять》（感服させる）は周囲のトーンとまったく異なる硬い語であり、(12)　その違和感ゆえに「低い」滑稽みを生む。

このような語り手の「低さ」は作品のトーンを民衆的にし、滑稽みを醸しだし、作者自身の姿を隠す。最後の働きについては説明が必要だろう。作者は「《他者の言葉》で語る。それゆえ語っている事柄に対し何ら評価を与えない。作者であるレスコフはまるで《他者の》言葉・口癖の陰に隠れているかのようだ。ちょうど彼が語り手や架空の文献、あるいは何らかの偽名の陰に隠れているように。」(13)とリハチョフは述べた。語り手の「低

さ」は語り手から、したがって作者から、知識人階級に属する多くの主義のどれかに依拠して社会批評を行うことを免除する。そして作者は知識人の論理で、すなわち民衆の外の論理で民衆を解釈する事もなく、解釈によって民衆の現実を歪める事もなく、民衆に内在する詩学にのっとって民衆の現実を物語ることができるようになる。

冒頭の段落にはレスコフの物語り方の第三の特徴の芽、過剰な語りの芽も読み取られる。ここでは、アレクサンドル帝が誰とでも「打ち解けた会話」をすることができたのは帝の「優しさ」ゆえであり、プラートフが始終皇帝に帰国を勧めていたのは「自分の領地が恋しい」からであるというように、うるさいほど理由付けがなされている。理由付けは、時に滑稽になりながら（たとえばプラートフは「妻帯者だったのでフランス語の会話は皆下らぬことと思っていた」（...был человек женатый и все французские разговоры считал за пустяки...）(26)）繰り返しなされ、語られていることを本当らしくする。本当らしくするのに成功していない場合も、本当らしくしようとする意図は感じられる。「レスコフはどんな事も分からないままにしておかない。彼の作品に動機付けられず練られていないテキストの断片はない。」(14)

どんな事にも理由付けをしようとするこの志向は、物語の発端がどのようにして生まれたのかさえ説明することを要求する。トゥーラの名工たちを、王の望みを実現してやろうとする試みに駆り立てる発端とは、ニコライ帝のプラートフへの命令である。

> А когда будешь ехать через Тулу, покажи моим тульским мастерам эту нимфозорию, и пусть они о ней подумают. Скажи им от меня, что брат мой этой вещи удивлялся и чужих людей, которые делали нимфозорию, больше всех хвалил, а я на своих надеюсь, что они никого не хуже. Они моего слова не проронят и что-нибудь сделают. (35)

> トゥーラを通るとき、トゥーラの我が名工たちにこの蚤を見せ、彼らにこれについて工夫させよ。我が兄はこの品に驚き、蚤を作った他国者を誰よりも褒めたが、私は自らの国民に何人にも劣らぬことを期待すると、我が言葉として彼らに伝えよ。彼らは、我が言葉に違わず、何事かをなすであろう。

この発端を理由付けるためには、アレクサンドル帝の西欧かぶれ、蚤が得られた経過、トゥーラの名工の存在など、多くが説明されなければならない。それらは一旦語られはじめると、タイトル・ロールを袖幕の陰に待たせたまま彼を忘れ、固有のリズムに乗って自己増殖する。この「発端」以前はすべて膨張した理由付けであり、本筋からの巨大な逸脱であるといってよい。

ザミャーチンによる「左利き」の劇化「蚤」の構成もこの事を裏付ける。「蚤」では最初からニコライ帝が登場して「発端」を与える。「発端」の理由付けはプラートフの報告によってなされる。その報告の言葉は、原作の言葉をたっぷり利用した、絶えず自己増殖しようとする言葉なので、再三再四逸脱する。したがってニコライ帝はそのたびごとに「蚤のことを話せ」とプラートフの報告を本筋に引き戻さなくてはならないのである。

さて、「左利き」の語りに固有なリズムとはどのようなものか。この作品でとりわけ目

立つ特徴が２つある。ひとつは三度の繰り返しである。イギリスの列品館では珍品が三つ列挙される。蚤は、まずクルミに収められ、クルミは煙草ケースに、煙草ケースは手文庫にと、三重にしまわれる。（出し入れの度にこの三重の手順は執拗に繰り返される）　蚤に蹄鉄を打ったトゥーラの名工は三人おり、彼らは三日間どこへも出掛けず座り通して蹄鉄を鍛造した。

三度繰り返す志向は言葉を増やす。「イギリス人たちはさまざまの珍品を示して、戦争用に自分たちはどれを何に使うのか説明しはじめた」で情報は十分伝わっているのに、何か品物を３つ挙げなくては物足りない。語り手は言い間違いを楽しみながら、１つ目の品物より２つ目、２つ目より３つ目の品物に、より詳しい修飾を施して、７音節、10音節、13音節と言葉を増やしていく。

буреметры морские
мерблюзьи мантоны пеших полков
для конницы смолевые непромокабли (27)

蚤を出し入れする手順も、一度述べれば繰り返す必要はないのに、それでもやはり、ぱたぱた三重の手順を踏む様子をことさら言葉で伝えるのが面白いのである。

三度繰り返すリズムは昔話から受け継がれた。「三度の繰り返しは昔話という、すべてのジャンルのなかで最も古いジャンルに古くからあるもの」[15]だという。三人の若者が語り継がれ、三頭の大蛇が耳に慣れ、三度の冒険が常套となって人々に染みつく。こうして内面化したリズムは語りを推進する力になる。語り手は落ちつきよく語るために三度繰り返し、三度の繰り返しは聞き手（読者）の胸にするりと落ちる。アレクサンドル帝が昔話の王の特徴でなく昔話の香気を受け継いだように、「左利き」の語り手は大蛇のモチーフでなく三度繰り返すリズムを受け継いだ。ここでもまた、昔話から受け継がれたのは具体的なものでなく、昔話の周りに漂う、それ自体を手にとることのできないものである。

「左利き」の語りに固有なリズムのふたつめの特徴は、音の詩的配列である。単純な頭韻や重韻が散りばめられているばかりでなく、物語が山場に差しかかると同時に音も高度に整った配列をとる。

① Повернул раз, повернул два---　◡ – – ◡ – –
② замок и вынулся.　◡ – ◡ – ◡
③ Платов показывает государю собачку,　– ◡ ◡ – ◡ ◡ ◡ ◡ – ◡ ◡ – ◡
④ а там на самом сугибе　◡ – ◡ – ◡ ◡ – ◡
⑤ сделана русская надпись:　– ◡ ◡ – ◡ ◡ – ◡
⑥ «Иван Москвин во граде Туле». (28-29)　◡ – ◡ – ◡ – ◡ – ◡

一度回し、二度回し、するとロックは抜けたのである。プラートフが帝に引き金を見せると、そのちょうど曲がっているところにロシア語の銘が《トゥーラ市のイヴァン・モスクヴィン》と彫られてあった。

便宜上詩のような形で書いたが、元のテキストでは改行はない。力点の排列を見ると、韻律の変わり目が意味の切れ目に一致しており、①だけが弱弱強強、②以降はヤムブとダークティリが交互に現れる。④の三脚めはヤムブが乱れているが、これは сгибе[z--] を сугибе[s--] に変えて самом[s--] と頭韻を作るためであろう。また音のほか、①から②には三のリズムが見られ、⑥ではモスクワのイヴァンがトゥーラにいることから滑稽みもそえられている。こうして音と内容が協力していやが上にもクライマックスを強調し、語り手の、愉快に、得意気に、抑揚を付け、間合いをとり、音を引き延ばしてたっぷりと語る様を彷彿させる。

以上レスコフの物語り方について作中人物の描き方・語り手の「低さ」・過剰な語りの3点を整理し終えたところで、作品の文章を見よう。冒頭の段落は三つの長い総合文から成っている。これは口語でなく書き言葉の特徴である。この書き方は、非知識人の口から流れ出た音声をありのままに書き留めたという体では決してない。青年時代の経験と、作家として名を成したのちも続けた努力[16]とによって民衆を深く知り得たレスコフが、民衆的な文体・リズム・イントネーションで民衆的な発想・物のつかみ方を具体化したテキストである。

<註>

(1) См.: *Аннинский Л.* Сто лет «Левши» / В мире Лескова, сборник статей. М., 1983.

(2) *Лесков Н.С.* Собр. соч. в 11-ти. М., 1956-1958, т. 7, с. 26.

以下引用は（ ）内にページ数を示す。訳は拙訳。

(3) *Столярова И.В.* В поисках идеала (Творчество Н.С. Лескова) Л., 1978. с. 157.

(4) там же.

(5) там же. с. 156-157.

(6) там же. с. 165.

(7) *Озеров Л.* Поэзия лесковской прозы / В мире Лескова: с. 283.

(8) *АНСССР* Словарь русского языка в 4 т. М., 1981: Разг. устар. / Толковый словарь русского языка под ред. Д.Н. Ушакава. М., 1939: разг. / *Ожегов С.И.* Словарь русского языка. М., 1986: разг. / *Ожегов С.И.* Словарь русского языка. М., 1989: разг.

以下語の文体はこれらの辞書によるものをこの順序で挙げる。

(9) ゴーリキイ「レスコフ論」福岡星児訳　「世界文学体系」98所収

(10) *Чичерин А.* Из истории эпитета / В мире Лескова: с. 290.

(11) Разг. / -- / разг. / разг.

(12) Книж. устар. / книж. устар. / высок. / высок.

(13) *Лихачев Д. С.* Особенности поэтики произведений Н. С. Лескова / Лесков и русская литература. М., 1988. с. 18.

(14) *Озеров Л.* с. 270.

(15) プロップ「ロシア昔話」斉藤君子訳　せりか書房, p. 193

(16) チェホフはレスコフとともにソボレンスキイ公園ののぞきからくりを見に出掛けたことをうれしげに兄に書き送っている。(Письмо Чехова 55 . Ал. П. Чехову Между 15 и 2 октября 1883 г. Москва.)